



◎本會幹事川上和吉氏 内務書記官川上氏は植田内務事務官、石原北海道廳部長、渡邊靜岡縣書記官、坂本山形縣書記官、河野山口縣書記官、達林福岡縣書記官、藤井、谷口、八島、小野、野口各地方事務官と共に滿洲國及關東州へ出張を命ぜられ直に出發せられた。

◎副會長中川吉造氏 本會副會長工學博士中川吉造氏は久しく病床につかれたりしが醫藥其の效なく遂に去る八月一日午後六時薨去せられ同月四日青山葬場にて告別式を行はれた、享年七十二歳、氏の經歷に付ては本誌第二十三卷第九號（昭和十六年九月刊行）に清水氏に依つて内務技監と今昔（四）の題下に記述せられて居る通りで我邦の土木界に遣されたる功績は多大であることは云ふまでもないのである。本會よりは花環弔詞弔慰金一封を呈した。

◎關港記念東京港誌（東京市役所）

故星亨氏が東京港築造の急務を力説せられたるは約四十年前で

ある、氏の先見の明は確かに今日あるを想はれたのである、東京市會の一部には其の尙早を主張したものもあつたが星氏は斷然之を排し自己の主張をつらぬいた、而し俄かに伊庭想太郎の爲めに其兇刃に斃れ事は蹉跌した。とはいへ星氏の功績は顯著である何故に其肖像を口繪にせざりしかは不思議に思ふ。何にはともあれ築港は約ほ成つた之が記念として港誌を編纂されたのは至極結構な事である。其の誌す所は先づ東京港の沿革として江戸時代、明治時代を述べて大正昭和に及び次で横濱港との關係を叙し開港の基本計畫、開港の實現に及び、大東亞共榮圏と東京港との關係に至り其の重要性を説述したものである。貴重なる文獻たるを失はれないことを信する次第である。（巴）

◎現戦時下の土木工法（河村協著）

著者の緒言を見ると（今や支那事變は遂に大東亞戦争にまで進展し、著しく長期性を帯びるに至つた、此の戦争に勝つため、大東亞共榮圏を建設するため、重要物資の確保は優先的でないならばならない。而して此の曠古未曾有の大事業完遂上に不可欠な土木工事は、物資の有無に拘らず施行しなければならぬ。茲に科學技術の重大性がある。即ち或は節約工法に依り、或は代用材料を使用する等資材の軽減を講ずることは、吾等のなすべき光榮ある責任である。洵に現下は科學技術の鍊磨達成に千載一遇の好機である。幸に本書が其の参考の一端にでもなれば著者の目的は達せ

られ光榮の至りである」と述べ、本書著作の企圖する所を記して居る。而して其の著述する所は先づ緒言を述べ、次に道路として側溝、水拔管、溝蓋、道路橋として無筋コンクリート橋、一般橋梁、木橋梁設計表、チベル擬寶珠、親柱文字板、珪酸性混和セメントを記述し第四章以下河川、竹材、防空橋梁（空襲判斷、破壊爆彈の效力、各種の爆彈の效力、防空橋梁、輕量コンクリート）努力問題を描へ尙附録として木道路橋設計示方書案を記して居る。著者が地方事務所土木課長として學理を實地に應用したる經驗に基き生れ出でたる本書が單なる理論のみならずは言を俟たない所である（巴）

○日本民族の南方圈馴化に就いて（田中秀作著彦根高等商業學校東亞研究所刊行）

（緒言、純粹民族と混血民族との馴化力、累代衰退と累代進化、熱帯風土病對策、本土に於ける氣候的鍛鍊結論）

○支那に於ける牙行の研究（山内喜代美著彦根高等商業學校東亞研究所刊行）

（序言、牙行概説、來行、花行、中心市場の牙行、輕紀と牙行、結言）

○蒙古案内記（岩崎繼生著蒙疆新聞社發行）

（我が蒙疆新聞社一周年記念事業の一つとして世に送り得ることとは最も欣幸とする所である。第一は本書が蒙疆と呼ぶる、防

共特殊地帯の輪廓も性質も日本に在りては勿論、接壤の滿洲國に於てすら極めて少數の最高識者を除いては殆ど辨識されてゐない今日の所産であること第二は蒙疆に關する旅行記、見聞録、觀光案内程度の端ものは幾らもあるが、また學術的論文も決して少なくはない、併し蒙疆の現在の姿を地文、人文の兩面から正確な資料を基礎として組織的に解説した書物がまだ一つも行はれてない今日の所産であること第三は著者が蒙疆政權内の少壯官吏として此の地に駐まること既に一年有半、青年學徒的研究心に燃えつゝ慨然としてこの筆を執つたこと等々の説明で東亞新秩序建設の偉業に役立たんとする最新最前線の報告であるとして目次として總説、地勢、氣候、住民、風俗宗教、古代文化、行政、鹽、石炭、鐵、羊毛、其の他の畜産、阿片、農産等産業、金融、交通及通信、張家口、大同、厚和、包頭、百靈廟の主要都市、結語を記述しておる尙附録として、大同石佛寺案内記をかゝげたもので百二十頁の小冊子ではあるが稀有の案内記である。（巴）

◎近刊圖書雜誌（寄贈交換）

○セメント界彙報（第四一三號）

○斯民（第三七卷七號）

○土木工業（第四卷七號）

（鳥居秀夫氏「官廳工事請負契約書の研究」）

